

実用性のある衣生活教育のあり方

—必要とされる生活技術の提案—

薩本弥生、昆野 領太

Ideal way of clothing experience education with practicality

:Proposal of needed living skill

Yayoi Satsumoto, Ryota Konno

1 諸言

戦後、経済的発展や、科学技術の進歩とともに、私たちの生活は急速に変化し、生活の利便性が向上し、生活していく上で必要となる家事労働の負担は大幅に軽減した。しかし、生活が便利になるにつれ、生活者の生活力は反対に低下しているといわれている。その原因の一つとして、洗濯機や掃除機などの家電製品の普及が挙げられる。便利さを追求することで家事労働は質を変え、機器の操作のみで様々なことができるようになった。この生活技術の簡略化が生活力の低下を招いていることは自明である。

旧来、生活技術は家庭内で家事分担を通して親から子へと伝承されてきた。しかし、現代では、核家族化の進行や、地域との交流の希薄化、女性の社会進出などによって生活様式が多様化し、家庭内で家事分担を子どもに担わせる意識が薄れ、世代間の伝承機能が正常に働きにくくなっている。世代間の生活文化の伝承については小菅ら[1]によって現代の20代女性とその母親世代、そして祖母世代との間での変化について調査されており、その解析結果により3世代間に差がみられ、生活文化の項目によって違いがあるものの、世代を重ねるごとに、生活文化の伝承が機能せず、衰退している項目が多いことが明らかにされている。

このような状況の中、懸念されるのは現代に生きる子どもたちの生活力習得の機会の減少である。上記のような生活の利便性の向上や社会問題の複雑化の影響から子どもたちが家庭において家事分担をすることが少なくなってきた

る。事実、NHK 放送世論調査所の生活時間調査[2]の結果では、平日に子どもたちが家事分担(家業の手伝いを含む)をする総平均時間は小学生で1970年の30分から1980年の20分へ、中学生に関しても1970年の70分から、1980年の22分へと減少している。70年から80年にかけての10年間で急激な減少が明らかとなっている。21世紀となった現代の状況はさらに悪化していると考えられる。岡村ら[3]は学齢期の子どもたちにアンケート調査を実施し、年齢等に見合った生活技術が備わっていないことによりトラブルが頻繁に生じていることを明らかにしている。家事分担の実施の減少によって生活技術が身につかず、様々な場面でトラブルを起こすのみならず、生活上で不経済な面も多く生じると考えられる。今後もこのような家事分担の実施の減少が進むようであれば、若年層の全体的な生活力の低下のみならず、それに関連した様々な問題が生じるのではないだろうか。

子どもの生活力低下の懸念から、学校教育において「生きる力」の育成に重点を置いた教育の推進が図られている。しかし、学校における家庭科教育がその趣旨に反する方向に変化している。現行の学習指導要領では、完全学校週5日制の導入のあおりを受け、家庭科の授業時間数が減少し、小中学校を通して家庭科で十分な生活力を養うための学習ができているとは言い難い状況となっている。矢野ら[4]は家庭科学習前の小学生と学習後の小学生との生活事象や生活行動に対する理解の違いについて調査し、家庭科学習が客観的かつ科学的な見方や捉え方に

影響を及ぼしていることを明らかとしたが、現行の内容では求められる生活力の確保にはまだ不十分であると考えられる。また、中学生を対象とした家庭科学習に対する意識調査[5]では、「中学校で勉強している教科で、これから生きていく上で役立つ教科、生涯にわたって勉強したいと思う教科はどの教科か」という質問に対して、1位の英語（38%）に次いで家庭科が2位（27%）となっている。また、家庭科の授業時間数の希望を調査した結果では、28%もの割合で「増やしたほうがよい」との回答を得ている。このように生徒たちのニーズがあるにもかかわらず、ニーズに見合った学習時間数が確保できていないのが家庭科の現状である。海外に目を向けると、日本と同様に衣生活に関する教育がなされているオーストラリアの例が鋏柄によって報告されている[6]。オーストラリアでは中等教育の中で「繊維製品とデザイン」という科目が設けられており、繊維製品に関する科学的、美学的知識の習得、そしてその知識を基とした消費者教育に重点をおき、被服製作技術の体得ではなく、文化、社会などの多方面から衣服をとらえることによって消費者として必要となる知識の習得に重点をおいた衣生活教育を行っている。しかし、日本の衣生活を取り巻く状況に合致するかどうかや、衣生活教育にかけられる時間数などを考慮すると、現行では同様の内容を取り入れ学習することは難しい。加えて日本の現状として、現在行われている内容でも十分に学習が完結できておらず、そういった状況のなかで子どもたちの学習意欲の低下が起きていることが坂井ら[7]により報告されている。家庭科の学習時間が限られている中で、家庭での生活力伝承機能の代替的な働きを担い、子どもたちがこれからの生活を送る上で必要な生活力を習得するためには、有用な生活技術・知識を見極め、厳選し、現代生活に見合うよう内容を再検討することが必要となる。これまで成人を調査対象とした必要性の高い生活技術・知識の検

討は、商品科学研究所[8]や堀内ら[9]によって行われてきた。商品科学研究所[8]の調査によれば成人の範囲においても年代毎に生活技術レベルに差が見られ、若い世代ほど便利な商品やサービスに依存する傾向が強く、特に著しいレベルの低下が、手作業に関わる技術に見られることが明らかになっている。また、堀内ら[9]はアンケート調査によって、衣生活技術の習得方法や必要性などについて質問し、「洗濯」や「既製品の選択と購入の仕方」、「被服の働きと適切な着方」などが生活上必要な項目であるとの調査結果を示した。しかし、これらはいずれも80年代、90年代に行われた調査であり、現代の状況はこれらとはまた異なっている可能性がある。また、調査の対象が成人であり、これからの世代を生きる子どもたちや、子どもたちについて一番関心のある保護者の意識を調査、検討した報告はあまり見られない。また、近年では健康志向や健康ブームに伴い、食分野に関しては「食育」として様々な方面から取り上げられ、栄養に関することだけではなく、食事のとり方や調理法、食を取り巻く環境などについても研究されてきている。テレビやネット上などでも数多く特集が生まれ、人々の関心も高くなっている。しかし、食同様に人間の生活にとって不可欠の衣の分野については、人々の普段の生活の中であまり意識されていないように思われる。

衣生活は、旧来の家庭で衣服を作る時代から、既製品を選んで購入する時代となった。市場にはたくさんの商品があふれ、欲しいものがすぐに手に入れられるようになった。被服管理についても高性能洗濯機の普及や合成繊維の普及などに伴って、以前ほど手間のかかる手入れが必要なくなった上にクリーニングなどの外部委託が進んでいる。このような状況から衣生活に対する関心の低下が起こっていると思われる。

そこで、本研究では上記をふまえ、現代に生きる子どもたちの生活をとらえ、家事分担の実施状況と、衣生活技術・知識に関する現状、意

識を調査することによって、今後生活していく上で必要とされる衣生活技術・知識について検討することを目的とする。さらに子どもたちの生活力の衰退に寄与している要因を見極め、その拡大を防ぎ家庭科の学習によって十分な生活力育成の一端を担えるよう、家庭科教育において子どもたちにとって有用な学習内容を検討し、実用性のある衣生活教育内容を提案することを目的とする。

2 研究方法

2.1 アンケート調査

本調査では、子どもたちの生活実態や生活技術・知識等の習得状況を把握することによって、生活技術・知識の家庭内伝承が機能しなくなった背景に寄与しているものを明らかにしようと試みたものである。また、学校教育・家庭科の学習が生活技術・知識の家庭内伝承の代わりを果たすことができるかという点に触れ、今後必要とされる生活技術・知識について、特に衣生活分野を中心に明らかにする。

一言で衣生活技術・知識といっても、その範囲は多岐におよぶ。洋裁や和裁などの伝統的な手作業的技術からミシンや洗濯機などの機器の使用法、着衣の選択に関わる事柄や、衣類の保管・整理など様々な事柄が考えられる。そこで本調査において衣生活技術・知識の内容を決めるにあたり、現行の小学校・中学校・高校の学習指導要領、教科書に記載されている事項、また大人を対象とした生活技術に関する先行研究[8][9][10]等を参考にして選定した。なお、対象を小・中学生としているため、児童・生徒期において年齢的・能力的に無理なくできるもののみとし、高度な技術を要すると判断されるものについては除外した。

2.2 調査対象者

- 1) 調査校：Y 大学教育学部附属 K 小学校
：Y 大学教育学部附属 K 中学校
- 2) 調査対象
：小学校 5 年生 120 名とその保護者 120 名

：中学校 1 学年 180 名，2 学年 45 名計 225 名

3) 有効回答

- ：小学生とその保護者 111 部 (92.5%)
- ：中学 1 年生 158 部 (87.8%)
- ：中学 2 年生 41 部 (91.1%)
- ：中学生合計 199 部 (88.4%)

4) 配布方法

：留置法（各学校へ協力依頼、訪問時に配布）

6) 回収方法：約 2 週間後の再訪問時に回収

7) 調査期間：2006 年 11 月～12 月

8) 調査項目

アンケートは子どもの生活時間を探るため基本的な生活習慣について 16 項目、家事分担の実施状況について 26 項目の普段の生活の中での実践度を問うた。また、衣生活に関わる技術・知識に関する 15 項目について、能力（どの程度できると思うか）、習得情報源（どのようにして身に付けたか）、実践度（普段どの程度行っているか）、必要意識（今後生活していく上で必要であるか否か）を問うた。その他、衣服の購入に関する設問や、流行に関する設問、家庭科学習に関する設問を設け、現代の子どもの生活実態と家庭科教育との関連について考察した。なお、属性をはかる項目としていくつか設問を設けたが、質問紙は各家庭のプライバシーを考慮し、無記名調査とし、回答内容から個人の特定できないよう配慮し、分析を行った。

2.3 解析方法

解析には SPSSver.15-20 を使用した。各項目の単純集計後、属性と家事分担・生活技術・知識との関連性や親子の認識差、家事分担に起因する要因等を調べるため項目に応じ平均値の差の検定、分散分析、相関分析を行った。

3 調査結果

3.1 生活時間についての校種比較

図 1 に a) 兄弟姉妹の数、b) 自分の部屋の有無、c) 家庭内での学習時間、d) テレビ視聴時間、e) 睡眠時間、f) 通塾、g) 塾以外の習い事と週あたりの通う頻度の分布を示す。

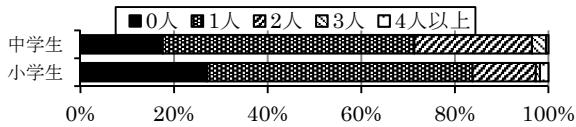


図 1-a) 兄弟姉妹の数 (*: $P < 0.05$)

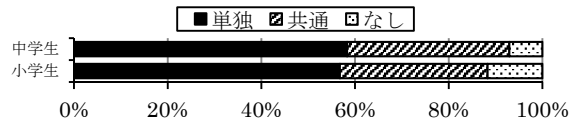


図 1-b) 自分の部屋の有無

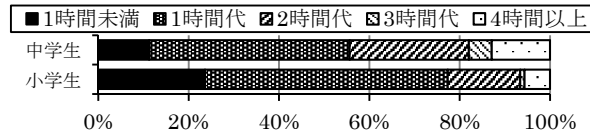


図 1-c) 学習時間 (***: $P < 0.001$)

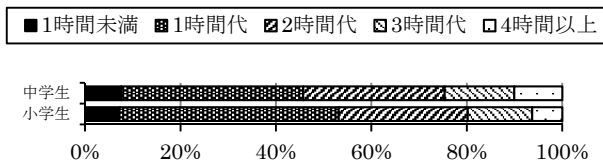


図 1-d) テレビ視聴時間

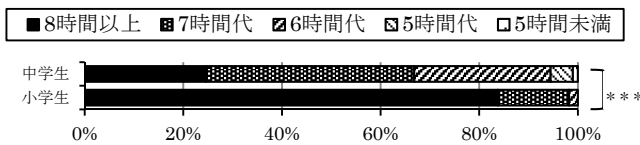


図 1-e) 睡眠時間 (***: $P < 0.001$)

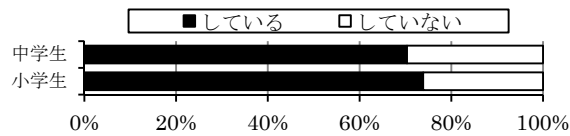


図 1-f)-1 通塾の有無

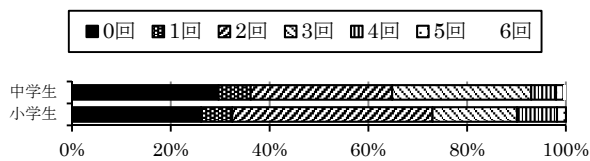


図 1-f)-2 週当たりの通塾回数

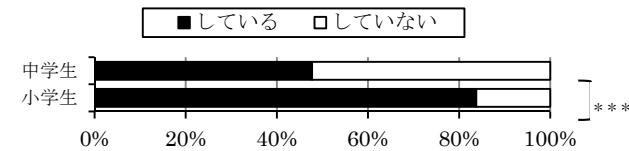


図 1-g)-1 習い事の有無 (***: $P < 0.001$)

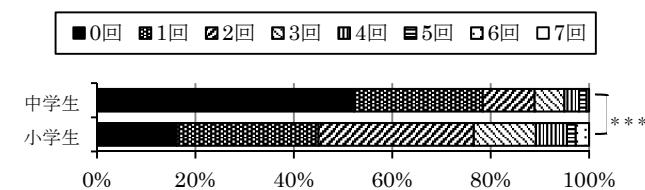


図 1-g)-2 週当たりの習い事の頻度 (***: $P < 0.001$)

校種で有意に差があったのは兄弟姉妹の数、睡眠時間と学習時間と習い事とその頻度であった。兄弟姉妹の数は0か1人の合計で8割前後を占め、平均は小学生の方が有意に少なかった。少子化がさらに進んでいると考えられる。自分の部屋の有無については校種による有意差はなく単独あるいは共有で部屋を持っている割合が9割前後であった。テレビ視聴時間は校種で有意差はなく平均は全体で1.9時間であった。睡眠時間の平均は小学生が8.2時間、中学生が6.9時間で中学生では7時間を切っていた。通塾率は校種で有意差なく71.6%であった。これは首都圏の小中学生を対象に調査した結果[11]と比べてもかなり高い値であり、今回対象とした学校の児童・生徒の特徴といえる。頻度は週2、3日が多く、校種間では有意差がない。塾以外の習い事に通っている割合は60.6%と通塾率に続き高い割合を示した。中学校における部活動は活動日が決められているため、週3、4回といった回答が多かった。ほぼ全員が参加しており、部活動に対して積極的な様子が分かる。習い事の頻度が有意に小学生で多かった。小学生は部活動がないため、習い事に放課後の時間を当てているのだろう。

以上のことから現代の小中学生の生活時間について推し量ることができる。平均的な小学生は放課後週数回塾や習い事に通い、帰宅後も学習やテレビ視聴などに数時間あて、夜10時前後には就寝するといった様子である。中学生に関しては、放課後はほぼ何らかの活動をしている様子がうかがえる。部活動に参加し、部活動のない日は塾に通うといった生活である。睡眠時間が小学生よりも短い分、学習時間やテレビ視聴時間が長くなっており、学習量が多いこと、テレビなどから情報を多く得ようとする様

子がうかがえる。また、上記に多くの時間を取られ、家族と共に過ごす団欒の時間や家事分担にあてる時間が十分に取れていない現状であると考えられる。

3.2 家事分担の実施状況の校種比較

生活技術・知識の習得には旧来家庭での伝承が主な役割を果たしてきたが、現代の家庭では伝承機能が働かなくなってきたのか、子どもたちは生活技術・知識の主な習得手段である家事分担をどの程度実践しているかについて調査した。なお、小学生の親は、自分の子どもが普段どれだけ家事分担をしているかについて回答している。以下に質問した 26 項目（朝刊取り、朝食作り、朝食片付け、夕刊取り、休日食事作り、風呂掃除、トイレ掃除、手紙取り、おつかい、洗濯機かけ、洗濯干し、洗濯たたみ、アイロンがけ、布団干し、ごみすて、靴磨き、子守り、ペットの世話、草木の世話、庭掃除、靴の整頓、家業手伝い）について校種による平均値の差の検定をした。図 2 に食事関連の家事分担の回答結果を示す。

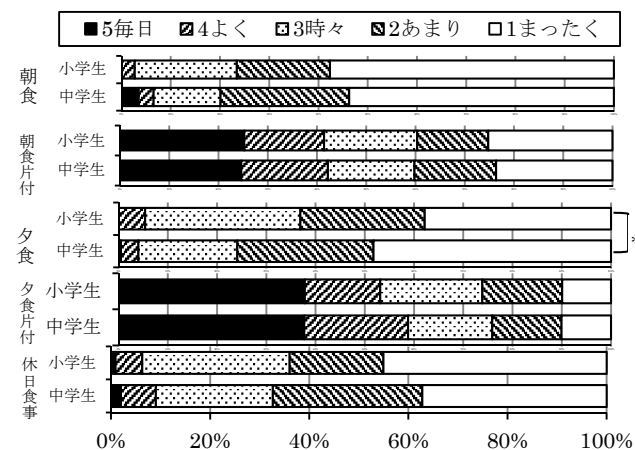


図 2 食事関連の家事分担の実施状況 (*: $P < 0.05$)

朝食作りは小・中学生とも約 20%が「時々手伝う」に留まり中学生では 80%が「全く」か「あまりしない」である。一方、朝食・夕食の片付けに関しては両校種とも朝食 20%前後、夕食 40%近くが毎日実施しており、時々まで含めると朝食 60%、夕食 80%近くが実施しており、食事後は片付けをする習慣の家庭が多い。夕食は

朝食よりも「時々している」割合は高い。校種を比較すると小学生の実施度が有意に高かった。休日の食事作りの手伝いは「時々行っている」回答が 30%前後で朝食の手伝いに比べその割合が高いことから休日のように時間的な余裕があれば手伝いをしようという意思があることが読み取れる。図 3 に洗濯・整理関連の家事分担結果を示す。

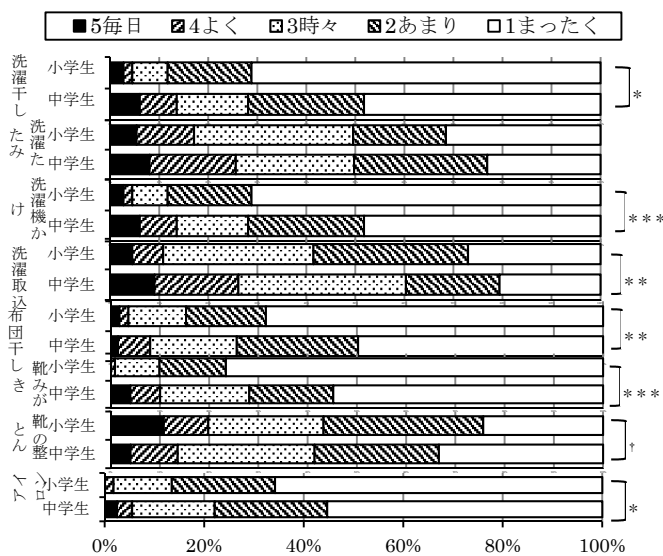


図 3 洗濯・整理関連の家事分担の実施状況 (***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$, †: $P < 0.10$)

洗濯・整理関連の項目は非常に実施度が低い。特に洗濯機かけ、布団干し、アイロンがけは全体に実践度が低く親任せであることがうかがえる。ただし、洗濯物を畳む以外は校種で有意差があり、靴の整頓は小学生の実践度が高く、その他は中学生の方が有意に家事分担することが分かる。家庭科で洗濯を取り上げるのが家庭での実践に寄与しているかもしれない。

住居の管理関連の家事分担実施状況を示す。

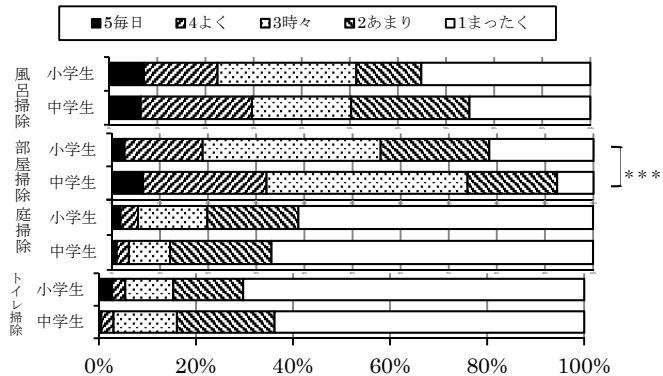


図 4 住居の管理関連の家事分担の実施状況 (***: $P < 0.001$)

庭やトイレ掃除は他の項目と比べて実施度はかなり低い。「時々」まで含めても 20%を下回る。風呂や自分の部屋の掃除は「毎日行っている」割合は低いが庭やトイレ掃除よりは分担意識が高く、特に中学生で実施度が高い。自分の部屋の掃除は有意に小学生より実施度が高い。

図 5 にその他の家事分担結果を示す。

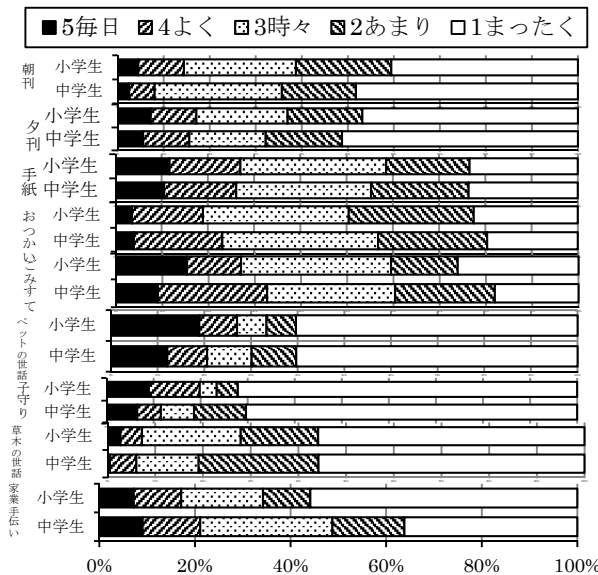


図 5 その他の家事分担結果

その他の家事分担は校種で有意差はなく比較的負担の小さい手紙取り、おつかい、ごみ捨て、ペットの世話等は実践度が高かった。子守り、草木の世話、家業手伝いの実施度はかなり低い結果となった。これらの項目は子供の手伝いを必要とする家庭が少ない結果と考えられる。

3.3 家事分担に対する親の意識

小学生の親に対し子供の 1 日当たりの延べ家事分担時間の調査結果を図 6 に示す。

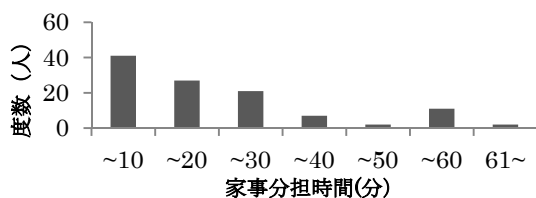


図 6 小学生の家事分担実施時間

家事分担時間が 1 日 10 分に満たない子どもが 30%以上を占め、平均が 24 分であった。いかに現代の子どもが家事分担をしていないかがわ

かる。子どもの手伝いの変化に関する研究[12]によれば、子どもたちの家事分担実施時間の激減は、戦後の高度経済成長期の流れとともに起こっており、進学競争などから、子どもの勤労の対象が手伝いから勉強へと転換したためと述べられている。図 1 に示したとおり、通塾率が 71.6%という現状からも、子どもの行動時間に対して学習が多く時間を占めていることを見てとることができる。小学生の親に対して家事分担 26 項目を子どもにさせたいかどうかを質問したところ、最もさせたいという意見が多かった「トイレ掃除」に関しても、5 人に 1 人が答えるに留まり、その他ほぼ全ての項目において少数の親がさせたいと答えるに留まった。親の意識の部分においても、子どもの家事分担を重要視していないことが明確となった。現代の子どもたちの家事分担実施度が低い理由のひとつに、親が子どもに期待していないということがあげられるのではないかと考えられる。ただ家庭での家事分担は、将来必要となるかもしれない生活技術・知識の伝承の主要因であることには変わりないため、この意識の低さは親から子へと伝承する大切な機会を逃しているということも言える。この機会の損失に気づいていない点が問題であり、今後親が子どもへ伝承するという観点において家事分担に感心を持つよう啓蒙していく必要があると考えられる。

3.4 衣生活技術知識習得状況の校種比較

家庭科学習における衣生活分野では被服実習の他、適切な着方や洗濯の方法、衣類のリサイクルにも触れており、実生活でも必要性の高い技術・知識が多くある。子どもたちが家事分担をあまり行っていない状況の中で、どのくらい能力が身につけているかを調査することにより、家庭科学習の衣生活分野において重きを置くべき点を見極めるために衣生活の習得状況の自己評価とともに、実行度・習得方法・必要性などもあわせて調査した。図 7 に衣生活技術・知識 15 項目の能力の結果を示す。

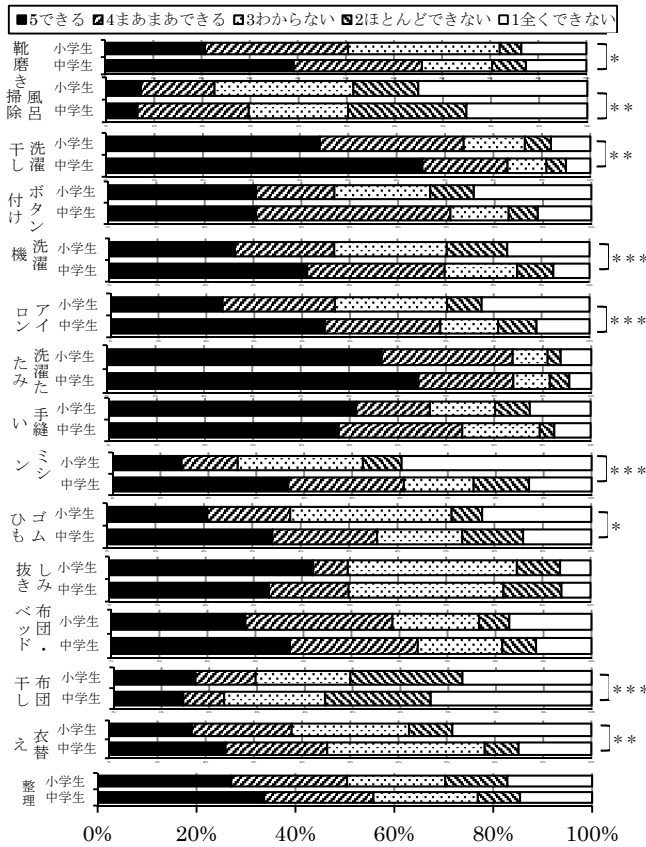


図 7 衣生活技術・知識に関する能力の校種による比較 (***): $P<0.001$, **: $P<0.01$,*: $P<0.05$)

家庭内で家事分担はあまり実施していないものの、衣生活分野の技術・知識に対する能力は比較的高い結果を示した。校種で比べると全項目で平均値は中学生の方が高く、特に「靴磨き」「風呂掃除」「洗濯物干し」「ボタン付け」「洗濯機洗い」「アイロンがけ」「ミシン」「布団干し」「ゴムひも通し」の9項目で有意差が見られた。また、15項目を因子分析した結果を表1に示す。

表 1 衣生活習得状況因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	命名
洗濯干し	.841	.527	.520	洗濯能力
アイロン	.761	.598	.516	
洗濯たたみ	.753	.618	.527	
手洗い	.734	.566	.504	
洗濯機かけ	.642	.419	.400	
ミシン	.505	.757	.486	縫製能力
ボタン付け	.534	.741	.449	
手縫い	.598	.729	.449	
ゴム・ひも通し	.442	.650	.441	整理能力
衣替え	.481	.489	.825	
整理	.491	.445	.755	
布団干し	.637	.447	.649	
布団・ベッド	.562	.474	.627	
染み抜き	.399	.478	.541	
靴磨き	.403	.423	.459	

洗濯能力、縫製能力、整理能力の3因子が抽出された。各因子の因子得点を校種で平均値の

差の検定をしたところ、各因子とも中学生で有意に高かった。

3.5 衣生活技術・知識の習得方法

衣生活技術 15 項目について習得方法を分類したところ主に3つのタイプに分けることができた。まず、一つめは主に親から教わるタイプである。家庭科学習からの習得は少ない。このタイプに属する項目は靴磨き、手洗い洗濯、洗濯機洗い、洗濯物干し、洗濯物たたみ、アイロンがけ、ゴムひも通し、布団の上げ下ろし、またはベッド・メイキング、布団干し、衣替えである。最も多くの項目がこのタイプとなった。次に、二つめは主に家庭科学習で習得するタイプである。このタイプは親から教わった割合よりも家庭科学習で経験し習得する割合のほうが多い。このタイプに属する項目は手縫い、ボタン付け、ミシンである。最後に、三つめのタイプテレビなどのメディア情報から習得するタイプである。このタイプは親から教わった割合が多いものの、その他の事柄に関しても30%以上が回答しているタイプである。染み抜き、たんす・クローゼット内の整理がこのタイプとなった。親から教わった割合が高いタイプは比較的簡単な技術・知識が多く、家事分担として習慣的に行われなくても習得できるものが多い。また、家庭科学習によって習得する割合が高いものは、比較的高度な技術・知識であり、また方法や手法がいくつかあり、ある程度の経験が必要とされる項目であると考えられる。平均値に小中学生差が認められた項目が該当していることから、家庭科学習がその習得の役割を担っていることがわかる。その他の事項に特徴の見られる項目は、近年の情報化社会の中で得られる情報を活用するものであり、汚れを効果的に落とす染み抜きや、合理的な収納法などはテレビや雑誌などから情報を取り入れ活用することで習得していると推察される。

3.6 衣生活技術の能力と実践度の相関

衣生活技術 15 項目の家庭での実践度を調査

し、因子分析し、表 2 の洗濯実践、縫製実践、被服管理実践の 3 因子が抽出された。

表 2 衣生活実践度の因子分析結果

項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	命名
洗濯機かけ	.891	-.035	-.119	洗濯実践
洗濯干し	.726	-.083	.052	
手洗い	.575	-.018	.132	
アイロン	.426	.271	-.029	
洗濯たたみ	.312	.109	.286	
ミシン	-.119	.778	-.020	
手縫い	.086	.672	-.050	
ゴムひも通し	-.097	.578	.092	
ボタン付け	.213	.525	-.066	
染み抜き	-.007	.317	.229	整理実践
整理	-.072	-.071	.787	
衣替え	.034	.068	.589	
布団・ベッド	.001	-.005	.541	
布団干し	.251	-.033	.442	
靴磨き	-.050	.201	.292	

先の衣生活力の習得との関連性をみるため、各因子得点を相関分析した結果を表 3 に示す。相関が高いものを網掛けした。衣生活の能力間、実践度間でも、縫製、洗濯、整理間で高い相関がある。また、能力と実践度との間には洗濯、縫製、整理いずれも能力と実践度の間には強い正の相関がある。つまり、家庭内での実践度が高ければ能力が高まることを示している。したがって、衣生活技術・知識は家庭内において経験を積むことによって他の能力も含め向上すると考えられる。

表 3 衣生活能力と実践度の相関分析結果

	洗濯能力	縫製能力	整理能力	洗濯実践	縫製実践
縫製能力	0.78***	1			
整理能力	0.73***	0.71***	1		
洗濯実践	0.47***	0.35***	0.38***	1	
縫製実践	0.33***	0.44***	0.33***	0.68***	1
整理実践	0.39***	0.33***	0.55***	0.69***	0.55***

3.7 衣生活技術の必要性認識

衣生活技術・知識 15 項目の各々の項目の重要性や現代の生活の中での必要な衣生活技術・知識と思うかを質問した。以下に小中学生が衣生活技術・知識各項目について「必要」と答えた割合を表 4 に示す。小・中学生とも洗濯機かけや洗濯物干しなどの洗濯に関してや被服管理に関する項目に多く必要性を感じていた。

表 4 衣生活技術・知識の必要性に対する校種差比較

項目	度数 (人)		ありの割合 (%)	
	小学生	中学生	小学生	中学生
靴磨き	22	43	19.8	21.6
ボタン付け	38	83	34.2	41.7
手洗い洗濯	51	91	45.9	45.7
洗濯機かけ**	60	139	54.1	69.8
洗濯物干し*	61	115	55.0	57.8
アイロンかけ*	43	107	38.7	53.8
洗濯物たたみ	47	96	42.3	48.2
手縫い*	29	55	26.1	27.6
ミシン†	28	62	25.2	31.2
ゴムひも通し†	26	59	23.4	29.6
染み抜き	31	18	27.9	9.0
布団・ベッド・メイキング†	34	87	30.6	43.7
布団干し	40	95	36.0	47.7
衣替え*	42	85	37.8	42.7
たんす・クローゼット整理*	45	90	43.5	45.2

(** : $P < 0.01$, * : $P < 0.05$, † : $p < 0.10$)

中学生の方が、洗濯機かけ、アイロン、洗濯干し、手縫い、衣替え、たんす・クローゼットの整理に関して有意に小学生よりも必要とする割合が高い。ミシン、ゴムひも通し、ベッド・メイキングについても有意傾向が見られた。しかし、しみ抜きに関しては中学生の方が必要性を感じていなかった。身の回りの整理に関する項目も割合が高い結果となった。アンケートの時期、中学生は家庭科学習において衣生活技能・知識としてミシンや手縫いなどの項目を学習済みで、小学生はミシンについてはまだ、学習していない状況であった。家庭で被服製作する機会はほとんどなく、現在は既製服を購入し、着用するため必要でないという割合が多いのだろう。

3.8 衣服や服装に関する子どもの意識

服装への関心やファッションに対する子どもの意識を探るために、服装に関する意識について調査した。調査内容は「服装や流行に関心があるか」(流行)、「服装によって気分が変わるか」、「鏡で服装をチェックするか」(鏡)、「似合う色や服装がわかるか」(似合い)、「着ていく場所や時間・回りの様子を考えて服装を決めるか」

(TPO)、「服装のコーディネートは靴まで考えるか」(靴)、「ブランドにはこだわらず、好き嫌いがあるか」(好き嫌い)の7項目である。なお、カッコ内は各設問の略号である。図8に結果を示す。

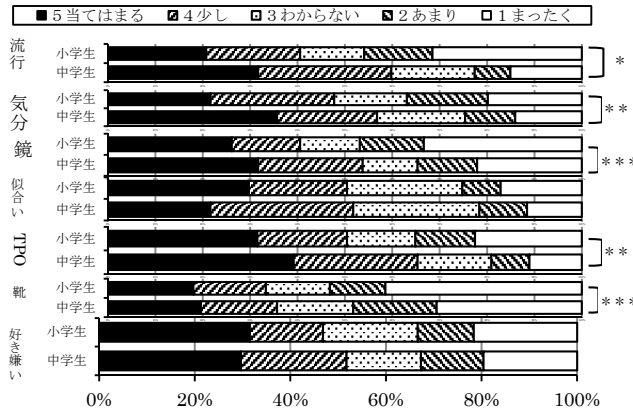


図8 服装関心度の校種による比較
(***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$)

校種による平均値を比較したところ、流行、気分、鏡、TPO、靴で中学生の関心が有意に高く、自意識が高まる中学生で、よりファッション関心度が高まること明らかとなった。性差をみると小中共に女子で有意に服装関心度が高かった。近年、小中学生向けのブランド衣料が流行し、親子でブランド品を着こなす様子や、祖父母が孫に買い与える光景が見られる。低年齢層向けのファッション雑誌が多数発行され、子ども向けの服装やファッションに関する情報が増えたことが反映していると考えられる。小学校高学年から中学生は自我に目覚め、他人の目が過度に気になる時期であり、衣服は外面の変身欲求を目に見える形で実現してくれる。この頃から衣服を自分で購入する機会が増え、衣生活の面でも親から自立する時期である。TPOにあった着方や、自分に似合う着方、個性を生かす着方など、単に流行を追うだけでない着こなしの方法を学習する必要があると考えられる。現状では中学校でのみ取り上げられているが、今後、家庭科の衣生活分野で小学生でも取り上げる必要があるかもしれない。

3.9 家庭科についての意識

家庭科学習を好きかの回答結果を図9に示す。

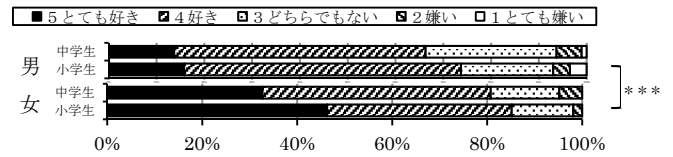


図9 家庭科学習を好きかどうか (***): $P < 0.001$)

校種によっては有意差がなかった。性差はあり、有意に女子が好んでいた。家庭科学習が「好き」「とても好き」と答えた割合は全体の75%にのぼり、子どもたちにとって家庭科は比較的好まれている。しかし、「家庭科の好きなどころ」という自由記述項目に対しては、回答のあったほとんどが“調理実習”であった。調理実習は作る過程、食べる過程共に楽しみがあり、失敗も少ないため男女問わず好まれている。一方、「家庭科の嫌いなどころ」という質問に対しては少数だが、男子に“被服製作”という回答が見られた。被服製作は、調理実習と同様に作る楽しみはあるものの運針やミシンの使い方など高度な技術を要することが多く、失敗した際にやり直しが難しい。また、個人の作業が多い。被服製作技能の習得にはドリルが必要だが時間が家庭科のみでは不十分である。今後、家庭との連携など学習方法を工夫すべき点であると考えられる。

3.10 衣生活能力・実践度と家事実践の関連性

衣生活技術・知識の能力、実践度が家事分担の実施度にどのように関連があるか明らかにするため、各々の因子得点間で相関分析を行った。その結果を表5に示す。

表5 衣生活技術・知識の能力・実践度と家事実践の相関

家事実践	洗濯能力	縫製能力	整理能力	洗濯実践	縫製実践	整理実践
洗濯関連	0.48***	0.37***	0.40***	0.64***	0.42***	0.53***
収納整理	0.29***	0.29***	0.35***	0.40***	0.38***	0.46***
食事準備	0.40***	0.34***	0.37***	0.39***	0.38***	0.37***
住居関連	0.21***	0.16***	0.23***	0.30***	0.25***	0.31***
食事片付	0.21***	0.23***	0.21***	0.27***	0.21***	0.29***

表より、衣生活技術・知識の能力、実践度は家事分担の実施度の各々と全て相関があり、今後、さらに洗濯・整理・縫製関連の能力を高め、実践度を高め、家事実践を促すようにしむけなければならないと考えられる。

3.11 家事分担実施への生活諸事象の影響

家事分担の実施度がどのような事柄に影響を受けているかを検証するため家事分担に関わる5因子の因子得点を従属変数に、生活事象の9項目(表6の項目参照)を独立変数に重回帰分析を行った。表6に結果を示す。表のβ係数は各項目の影響を標準化した係数である。有意となった項目を網がけして示す。

表6 家事分担実施度への生活諸事象の影響

項目	β係数				
	食事片付	洗濯	整理収納	住居	食事準備
個室有無	.005	.053	-.050	-0.14*	.044
睡眠時間	0.18**	.019	.050	.087	-.014
TV時間	-.029	-.035	-.024	.000	-.029
学習時間	.042	.085	0.13*	0.16**	-.003
通塾	.001	.042	.090	0.11†	0.11†
習い事	-0.11†	-0.13*	-0.15*	-.038	-.074
学童参加	.037	-.062	-.047	-.052	-.054
母仕事	-.082	-0.17**	-.080	-0.10†	-0.12*
部活動	-0.129†	-0.20**	-.053	.051	-.045

(** : $P < 0.01$, * : $P < 0.05$, † : $p < 0.10$)

食事片付け家事分担は睡眠時間に正の影響を受け、習い事、部活動は負の影響を与えていた。洗濯関連家事分担は習い事、母仕事、部活動に負の影響を受けていた。整理収納家事分担は学習時間に正の相関、習い事に負の影響を受けていた。住居関連家事分担は個室と母仕事に負の影響を受け、学習時間と通塾から正の影響があった。食事準備家事分担は通塾から正の、母仕事から負の影響を受けていた。全体的な傾向として習い事や部活動、母仕事から負の影響があった。習い事、部活動はそれらに時間を奪われること、母が有職だと家事について日々細かく指示されにくいことが家事分担実施度を下げている原因かもしれない。意外なことに学習時間や通塾時間

が長いほど整理収納や住宅関連の家事分担をする傾向が見られた。きちんと時間管理して長時間学習ができる子どもは整理整頓の習慣が身につけているのかもしれない。

3.12 衣生活技術・家事実践度認識の親子差

小学生およびその親とペアで対応がとれるようにアンケートを行った。そこで、親子で家事分担実施度、衣生活技術・知識の能力・実践度についての認識が一致しているか検討を行った。

親子共通の設問に関する回答の両者の差を集計し、その後の解析に用いた。すると認識差がある親子が多数いることがわかった。親が子どもの能力について過剰に評価している、子どもの回答よりも親の回答の方が過小評価で「あまりしていない」と回答する、などの認識の差である。こういった親子間の意識の差は、親の子どもに対する評価基準によって異なってくる。親の子どもに対する見方、評価の差が子どもの家事分担の実施度、衣生活技術・知識の能力、実行度にどのように反映されるのかについて検証した。検証方法として、小学生の各項目の得点化した数値から、親の得点化した数値を引き、新たな数値を求めた(※1)。この新たな数値は親子の各項目に対する認識差を表す数値となる。次に評価を高低に分けるため、その値が負の値になるものに-1、差がないものに0、正の値を示すものに1を代入した(※2)。そして家事分担、衣生活技術それぞれのカテゴリ内の項目を全て合計し、認識ポイントとした(※3)。認識ポイントの値は絶対値が大きいほど親子間で認識差のあった項目が多いことを示す。さらにその認識ポイントをカテゴリ内で統一するため、負の値を示すものを過小評価値-1、差がないものに関しては共通認識値0、正の値を示すものに過小評価値1を新たに代入し、認識度とした(※4)。各カテゴリ内において認識度が-1であれば過小評価、0であれば共通認識、1であれば過小評価ということになる(※5)。※1から※5の流れを図10に例示する。

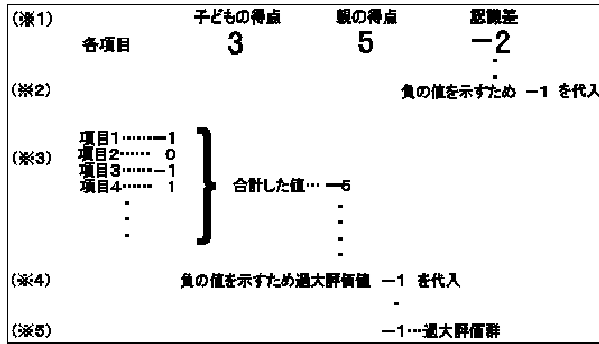


図 10 親子の認識差評価方法のプロセス

過大評価群と共通認識群と過小評価群の 3 群に分け、子どもの家事分担実施度、衣生活技術能力、同実践度を分散分析で有意差があるか検討した。図 11 に家事分担実施度が親子の認識差により有意差があった主な項目に関してその結果を示す。

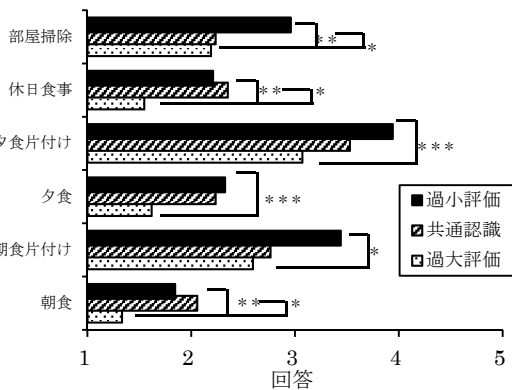


図 11 親子認識差による家事分担の比較
(***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$)

小学生の家事分担を親が過小評価で厳しめに評価している方が朝食、夕食の片づけ等で有意に家事分担を行っていた。図 12 には、家事分担因子の親子認識群別で比較した結果を示す。

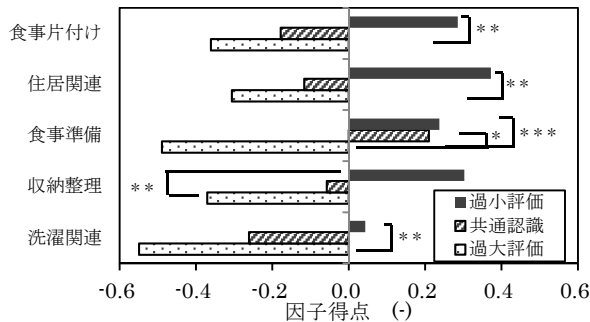


図 12 親子認識差による家事分担因子の比較
(***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$)

過小評価群が過大評価群よりも家事分担因子得点の 5 因子共に有意に実践度が高くなった。

図 13 には、衣生活技術・知識の実践度を親子認識差群別に比較した結果を示す。

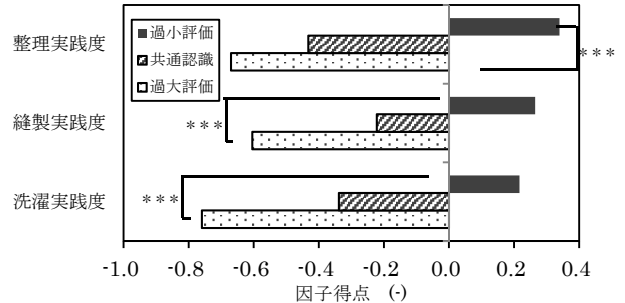


図 13 親子認識差による衣生活技術・知識実践度の差
(***: $P < 0.001$)

衣生活技術・知識の実践度の 3 因子（整理、縫製、洗濯）いずれでも過小評価群が過大評価群よりも有意に高かった。親が家庭での子どもの実践の様子を正しく評価することが実践を促すのだろう。

図 14 には衣生活技術・知識の能力を親子認識差群別で比較した結果を示す。

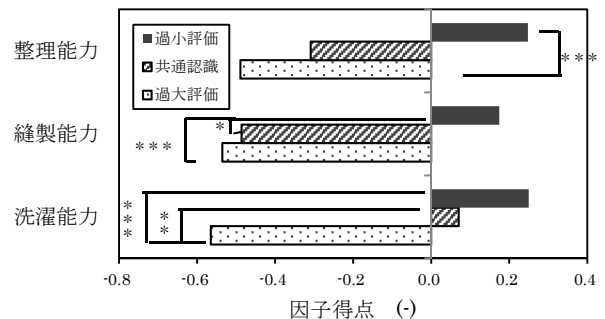


図 14 親子認識差による衣生活技術・知識の能力の比較
(***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$)

家事分担や衣生活技術・知識の実践度と同様に能力を親が子の自己評価よりも過小評価する群において能力の 3 因子とも有意に高かった。

以上の結果から親の評価によって子の家事分担や衣生活技術に対する態度が異なり、親が子に対して家庭内の生活態度を適切に評価することで子の生活力が高まることが分かった。親が子どもの生活態度を良く理解し、適切に厳しく評価し、「しつけ」することが現代の家庭にとって必要なことと考えられる。

3.13 衣生活技術習得の必要性認識の親子差

衣生活技術・知識 15 項目の小学生親子の認識差を分析するため、小学生の親子が「必要」と答えた割合を図 15 に示す。なお、図の横軸は小学生の回答割合の高順に項目を並べている。

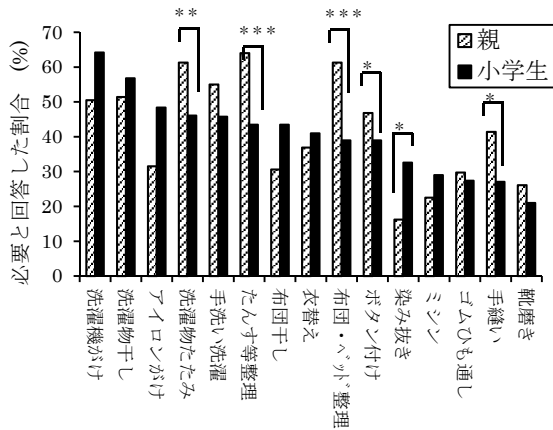


図 15 衣生活技術知識の必要性に対する親子の回答差
(***: $P < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $P < 0.05$)

親子共に洗濯機がけや洗濯物干しなど洗濯に関する項目に比較的多く必要性を感じている。親子で有意に親が高かった項目が洗濯物たたみ、たんすなどの整理やベッドなど身の回りの整理、手縫い、ボタン付けであった。自分の部屋のたんすや布団の整理整頓の習慣および手縫い、ボタン付けなどの裁縫技術は生活上、身につけてほしい衣生活技能と親がより高く認識していた。小学生の必要かどうかの判断基準は現在の必要性に限られ、現状の自己の能力にも影響される。したがって小学生の必要性の認識だけで重要な衣生活技術かどうかを見極めることが難しく、その点では親の回答のほうが、経験的に将来まで見越して本当に必要かどうか反映された結果であると考えられる。親の必要とする割合の低かった染み抜きは、現在ではクリーニング業者に外部委託することがほとんどであり、この結果から、今後、家庭科学習において、染み抜きなどの項目が学習対象として必要かどうかは検討の余地があると考えられる。ミシンに関しては家庭で被服製作する機会はほとんどなく、現在は既製服を購入し、着用することがほとん

どであるため必要と回答する割合が少なかった。しかし、手縫いやボタン付けに関しては親の回答は小学生よりも有意に高く、将来を見越して補修できる能力の習得を期待しているのだろう。

ミシンや手縫いなどの縫製技術を家庭科で扱うことは衣生活に直結しての必要性は減少しているが、被服製作をすることは子どもたちの手指の巧緻性を高める効果や、段取りや全体の見通しを持てるかなど製作過程で獲得する力を育むことが期待される。さらには高齢社会の到来に向けてライフサイクルの後半の高齢期に必要なお直しの技術獲得や将来の衣生活の充実に向けて裁縫技能の習得など被服製作の意義を問い直す必要があると思われる。

3.13 服装に対する関心度との関連性

小中学生の服装やファッションへの関心の有無によって衣生活分野への積極性に違いがあるのか検討するため、3.8 で取り上げた衣服や服装に関する子どもの意識 7 項目について因子分析し、因子得点を算出し、服装関心度指標とした。因子得点の平均値 \bar{x} と標準偏差 SD を算出し、平均値 $\pm 1/2SD$ を基準として服装関心度低値群、中間値群、高値群とした。各々 97 (42,55)、105(38,67)、108 (31,77) 名となり、ほぼ 3 分割できた。なお、括弧内は小学生、中学生の内数である。服装関心度 3 群による家事分担実施度 (衣生活分野)、衣生活技術能力、同実践度との関連を、分散分析を用いて有意差検定した。

図 16 に服装関心度 3 群毎の衣生活関連の家事分担実践度を、校種を凡例に示す。中学生では衣生活関連の全ての項目で服装関心度の高値群と低値群で実践度に有意差が見られた。小学生では洗濯干しと洗濯たたみのみで有意差が見られた。3.8 で前述したように中学生が小学生よりも服装関心度が高かったためより顕著に有意差が表れたと考えられる。

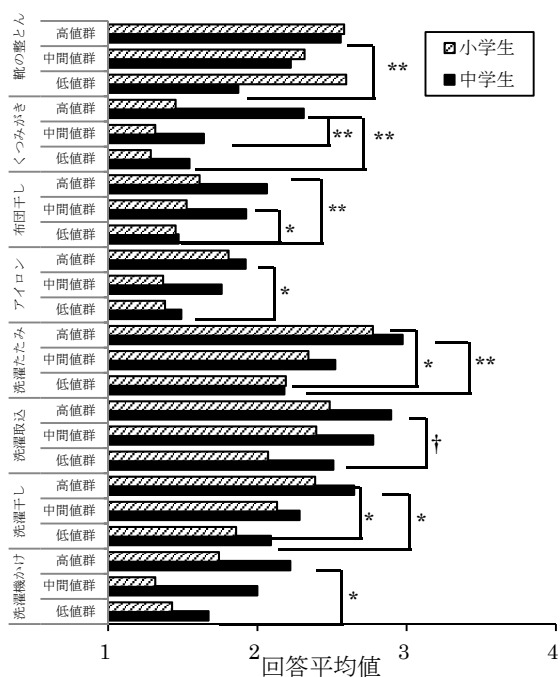


図 16 服装関心度群別の家事分担実践度の比較 (***): $P<0.001$, **: $P<0.01$,*: $P<0.05$, †: $p<0.10$)

表 7 に服装関心度 3 群毎の衣生活関連の能力を、校種毎に有意差を示す。

表 7 服装関心度群別の衣生活関連能力の比較

項目	群別	中学生平均	小学生平均	中学生有意差	小学生有意差
靴磨き	低値群	2.98	3.29	高-低	高-低 NS
	中間値群	3.75	3.21	中-低	中-低 NS
	高値群	4.25	3.77	高-中	高-中 NS
ボタン付	低値群	3.42	2.69	高-低	高-低 *
	中間値群	3.54	3.55	中-低	中-低 *
	高値群	4.13	3.45	高-中	高-中 NS
手洗い	低値群	3.53	3.52	高-低	高-低 *
	中間値群	3.84	3.79	中-低	中-低 NS
	高値群	4.19	4.16	高-中	高-中 NS
洗濯干し	低値群	4.16	3.62	高-低	高-低 *
	中間値群	4.16	4.03	中-低	中-低 NS
	高値群	4.62	4.35	高-中	高-中 NS
洗濯たたみ	低値群	3.85	3.86	高-低	高-低 **
	中間値群	4.31	4.34	中-低	中-低 NS
	高値群	4.74	4.68	高-中	高-中 NS
手縫い	低値群	3.64	3.45	高-低	高-低 †
	中間値群	4.01	3.97	中-低	中-低 NS
	高値群	4.32	4.26	高-中	高-中 NS
ミシン	低値群	3.22	2.00	高-低	高-低 *
	中間値群	3.58	2.87	中-低	中-低 *
	高値群	3.88	2.84	高-中	高-中 NS
布団・ベッド	低値群	3.22	2.93	高-低	高-低 *
	中間値群	3.52	3.71	中-低	中-低 *
	高値群	4.22	3.87	高-中	高-中 NS
たんす整理	低値群	2.71	2.52	高-低	高-中 NS
	中間値群	3.31	3.63	中-低	中-低 ***
	高値群	4.27	3.97	高-中	高-中 NS

(***): $P<0.001$, **: $P<0.01$,*: $P<0.05$)

小中学生共に表 7 に示した全ての項目で服装関心度が高いほど平均値が高く、高値群、中間群、低値群のいずれかの間に衣生活関連の能力に有意差が見られ、中学生でより顕著に服装関心度との強い関連性がみとれた。

表 8 に服装関心度 3 群の衣生活関連技術知識の実践度の平均値と有意差を校種毎に示す。全般に実践度は低い。また、洗濯機、洗濯

表 8 服装関心度群別衣生活技術知識の実践度

項目	群別	中学生平均	小学生平均	中学生有意差	小学生有意差
靴磨き	低値群	1.49	1.38	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.52	1.32	中-低	中-低 NS
	高値群	1.90	1.45	高-中	高-中 NS
ボタン付け	低値群	1.40	1.21	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.42	1.29	中-低	中-低 NS
	高値群	1.62	1.16	高-中	高-中 NS
手洗い	低値群	1.51	1.48	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.57	1.42	中-低	中-低 NS
	高値群	1.77	1.81	高-中	高-中 NS
アイロン	低値群	1.47	1.29	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.55	1.53	中-低	中-低 NS
	高値群	1.84	1.48	高-中	高-中 NS
洗濯たたみ	低値群	1.96	1.79	高-低	高-低 *
	中間値群	2.15	1.89	中-低	中-低 NS
	高値群	2.27	2.32	高-中	高-中 *
布団・ベッド	低値群	1.62	1.36	高-低	高-低 **
	中間値群	1.69	1.59	中-低	中-低 NS
	高値群	2.09	1.97	高-中	高-中 NS
衣替え	低値群	1.38	1.14	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.43	1.45	中-低	中-低 NS
	高値群	1.65	1.42	高-中	高-中 NS
たんす整理	低値群	1.47	1.29	高-低	高-低 NS
	中間値群	1.75	1.68	中-低	中-低 NS
	高値群	1.96	1.90	高-中	高-中 NS

(***): $P<0.001$, **: $P<0.01$,*: $P<0.05$)

干し、手縫い、ミシン、ゴムひも、しみ抜き、布団干しでは群毎の有意差が見られなかった。しかし、表 8 に示した項目では服装関心度が高いほど平均値が高く、高値群、中間群、低値群いずれかの間に実践度に有意差が見られた。また、中学でより顕著に服装関心度との強い関連性がみとれた。

これまで小学校の家庭科学習では服装やファッションについて深く触れることはなかった。家庭科の学習指導要領にも“ファッション”という文字は記載されていない。服装に関して小学校では、“衣服に関心をもって...”とあるものの、“衣服の着方に関しては保健衛生上または、生活活動上での着方を考えること”となっている。しかし、今回の調査において服装やファッションに関する関心度と衣分野における生活力との間には相関があることが明らかとなった。これは衣生活を学習していく上でも重要なことと考えられる。相関があるのは直接的な原因と結果とは考えにくい。ファッション関心度高値群の子どもは生活全般に意欲的な子どもなのではないかと思われる。彼らは服装やファッションについて学習することにも家庭での家事手伝いの実施、衣

生活技術・知識の習得、同実践度にも意欲的であるため、総じて生活力が向上すると考えられる。ただ、学校教育において、流行を追うことなどに重きを置くのではなく、衣服と自分、衣服と他者との関係性について正しく理解し、適切な衣服を選択できるようにすることが重要である。

4 考察

4.1 調査結果から見える子どもの実態

今回の調査で現代の小中学生の家事分担の実施度の低さが明確となった。家事分担の項目を決めるにあたって、そのレベルを考慮した。実際に調査した項目は、小中学生にもできる無理のないものであり、今回の調査にあたっては適当であったと思われる。対象とした 26 項目以外に家庭で行なっている家事分担について自由記述を求めたが、回答はごく少数であり、家の雨戸の開閉や、シャッターの開閉などであった。また、家事分担実施時間、平均 24 分で、10 分に満たない子どもが 40% 以上にも達するという結果からも、いかに現代の子どもたちが家事分担を行っていないかが垣間見られる。

では、現代の子どもたちはなぜ家事分担をしないのであろうか。アンケート調査結果から、現代に生きる小学生、中学生の生活実態を垣間見ることができた。生活時間を調査した結果では、小中学生合わせて 70% を越える割合で塾に通っていることが判明した。アンケートの対象となった小中学校がいわゆる進学校ということもあってか、このような結果となったが、進学を控えた小学 6 年生や中学 3 年生ではこれよりも高い通塾率が予想される。塾だけでなく、習い事やスクールなどに通っている割合も高く、部活動等をあわせるとほぼ毎日何かしらの活動を行っているのではないだろうか。毎朝早く起き学校へ通って勉強をし、その後も塾へ行ってまた勉強する。

子どもたちは、塾のある日は夕食を塾で摂るのだという。そして家に帰ればすでにかなり遅い時間になっている。そこで次の日の準備や残った宿題をするなどし、寝る。このように子どもたちは放課後、部活動、習い事、通塾などに時間を使い、大人同様忙しい日々を過ごしている。家庭においても学習の時間が求められている。子どもたちはただ無用に時間を消費しているのではなく、子どもたちなりに現代を生きるための時間を費やしている。

今回の調査では、家事分担の実施度と様々な要因の関連性について検討した。その結果からは、部活動や習い事で時間を奪われること、母親も仕事を持ち家で家事分担を細かくしつける時間が不足気味だと家事分担が少ない傾向が見いだされた。これらは家事分担の実施状況が子どもたちの内的要因に依存していることを示している。

さらに外的要因、社会的要因も影響していると考えられる。子どもの通塾や学習時間の拡大や女性（母親）の社会進出も、歴史的に日本が農耕型社会から工業型社会へ、そして第 3 次産業を中心としたサービス、情報を享受する消費・高度情報化社会へと変化していく中で生まれたものであり、子どもたちの労働の対象が家事分担から学習へと変化していったのは社会的変化を背景とした必然の変化と考えられる。日本は戦後経済的に大きく発展し、社会の様相も変化し、子どもを取り巻く環境も大きく変化した。農耕型社会であった頃は、子どもたちは親の仕事を引き継ぐことが常であり、職業を選択するという概念もあまりなかった。しかし工業型社会、情報化社会と変遷していく中で、職業を自由に選択できる代わりに、競争が生まれた。子どもたちはより良い大学・職場に入るために勉強せざるをえない社会の中で生きている。そのような背景によって子どもの労働の対象が家事

分担から学習へとシフトしていった。家事分担を通して職を学ぶ時代ではなくなった。

加えて、親の子どもに対する家事分担を行わせる必要があるとの意識も非常に低い。現代では様々な家電製品や商品、サービスなどが流通し、家事労働そのものの負担が減少しているため、子どもは家事分担を難しいものではなく、経験を必要としないという意識があるのではないだろうか。したがって、子どもは家事分担をする必要性を意識しなくなり、親も子に家事分担させることを必要と認識しなくなったのだろう。しかし、靴を整理したり、食べ終わった後の食器を片付けたりなどの行為は社会的な常識、マナーであり、家事分担はそれを学ばせるためのトレーニングの場である。今回のアンケート調査では、結果として記載はしなかったものの、基本的な生活習慣についてもいくつか質問を設けた。「ハンカチ・ティッシュの用意をしているか」や「脱いだ靴をそろえるか」、「寝間着やパジャマを畳んでしまうか」などを問うたものであるが、半数はしっかりと自分で実施しているものの、親任せや、全くしていないという回答も目立った。このように自分のことも満足にできない子どもたちには生活力が育まれていないかもしれない。基本的な生活習慣を正しく送るためには自分のことは自分でと、小さな頃から習慣的に行わせることが望ましい。その中で家事分担などを取り入れていくことで生活力が育まれていくのではないだろうか。

親は子どもにとって大切な基本的な生活習慣すなわち生活力を養うために生活技術や知識を習得させる第一の要因であり、親がそのことに対して意識が低いということはしつぱおよび教育的に大きな問題である。家庭での家事分担は、将来必要となるかもしれない生活技術・知識の伝承の主要因であることには変わりないため、この意識の低さは生活技術や知識を親から子へと伝承する大切な機会を逃してい

るともいえる。この機会の損失に気づいていない点が問題であり、今後、親が子どもへ伝承するという観点において家事分担に感心を持つよう啓蒙していく必要があると考えられる。

一方で、家事分担の実施度は低かったものの、衣生活技術・知識に関しての能力は比較的高く、小学生5年生、中学1、2年生のという学年を考慮しても習得状況は良好であった。特に、小学校で一通り家庭科を学習した中学生は、全ての項目で小学生よりも平均値が高くなっていった。能力の向上は、子ども自身の経験の差も考慮されるべきで、一概に学校教育の影響であるとは言えない。しかし、衣生活技術・知識の習得の主な要因として家庭科学習があげられる項目がいくつか見られ、家庭科学習が子どもたちの生活力向上に役立っていることが確認された。しかし、前述のように衣生活技術・知識の能力を身につけることの重要性については子ども自身もその親もあまり認識していない。現代では、技術や時間を要しなくとも生活できてしまうからだろう。今後この点に関しては家庭科教育のカリキュラムを考える上でも、考慮しなければいけない点ではないだろうか。文部科学省の「体験活動の推進」、従来の教員が知識を伝えるだけの教育から、自分で考えて問題解決する「アクティブラーニング」(能動的学習)への質的転換を求める答申が中央教育審議会から出され[13]、小中高校にも広がりつつある。体験学習や能動的学習について推奨される方向にある。子どもに将来を見据えて生活課題を提示し、子どもが興味関心を持って取り組めるように学習内容を考え、内容を組むことが必要となる。

例えば、現代的課題として地球温暖化の問題を挙げる。温室効果ガス排出抑制のため、エアコンの使用を抑制する際、人の温熱的快適性を維持するため、2005年からのクールビ

ズ、ウォームビズ運動が開始された。2011年の東日本大震災による原発事故により省エネもなどの要望もあり、被服への期待はさらに高まった。その他、災害時の衣服の対応方法、災害用救援衣服の提案、各種防護服の機能と快適性、高齢社会と介護服等、現代社会に求められる衣服の研究課題は多い。課題の本質をとらえ（なぜ取り組むのかを明確にし）、解決できる方法を考える力を家庭科で身につけさせたい。課題に対して自分たちにできる対策を考え実践につなげる授業展開が必要となるだろう。

衣服には保健衛生的、生活活動的役割のほかに、社会的役割がある。その中で服装規範やTPOに合わせるという他、個人の個性の表現（自己顕示や装飾審美的側面）もある。今回の調査で子どもたちの服装に関する関心度も高いことが明らかとなった。また、被服に対する関心度と衣生活分野の生活力に相関があることが示された。家庭科教育においても衣服に対する関心を伸ばすことによって、衣生活分野全体の興味関心を活性できると考えられる。

4.2 必要とされる衣生活教育

衣生活に関するアンケートを実施・分析することによって、今後の衣生活教育を考える上で参考になる点がいくつか見出された。

第1に洗濯に関する技術の習得である。今回の調査では親子共に洗濯に関する事項の必要性認識が高い結果となった。また、洗濯に関する項目は家庭科で扱っているにも関わらず、家庭科学習からの習得割合が低いものが多く、家庭での習得に加えて教科の中で効率的な方法や科学的な原理、環境との関わりで適切な方法を取る必要性について理解させるなど課題解決的に学習するとよいと考える。

現行の小学校の学習指導要領には「日常着の手入れが必要であることがわかり、ボタンつけや洗たくができること。」とあり、中学校

では、「衣服材料に応じた日常着の適切な手入れと補修ができること。」とある。実際には小学校で洗濯を取り扱う場合、洗濯物の点検から、洗う、すすぐといった工程の把握と、手洗い洗濯を中心とした作業をおこなうこととなる。しかし、現代の家庭の中では、日常着を手洗いのみで洗うとはあまりなく洗濯機を使用することがほとんどなので、洗濯機を用いた学習が望ましいと考える。手洗いをおこなうことによって洗濯の原理を知るということも考えられるが、洗濯機の仕組みなどを理解することで洗濯機洗いでもそれが可能であると考えられる。体験的に作業する部分に関しては、洗剤量による汚れの落ちの違いなどを実験的におこなうことによって、洗剤と環境との関連についても考えることができると思われる。中学校段階に関しては、衣服材料に応じてとあるように、素材の違いや、織り方・編み方の違いによって、適切な洗濯方法を工夫するようにし、必要に応じて手洗いや、クリーニングサービスの利用などを検討するように指導するとよいのではないだろうか。

第2に、衣類の整理や収納などの学習である。衣類の整理や収納に関しては衣分野で十分に取られてはいない。しかし、アンケート調査によって必要性が高い項目としてあげられ、小学生や中学生の段階において学習が適切な項目と考えられる。収納の仕方によっては、衣類が酸化したり、虫食いにあうなど、衣料として使用できなくなってしまう可能性や、たたむ・吊るすなどの整理を怠るとしわが生じ、見た目が悪くなってしまう場合があるため、家庭科学習を通して子ども期からしっかりと整理収納方法を身に付けるべきと考える。衣類の整理・収納といってもいろいろと方法があるが、シャツなどの基本的なたたみ方などを導入とするとよい。各家庭においてたたみ方の違うことが考えられ、

子ども自身でたたみ方を工夫したり、効率を競うなどするとよいのではないだろうか。また収納の際の整理の仕方やたんす・クローゼットなどへのしまい方など工夫できるとよい。衣服の種類や構成などによってはたたむことが適切でないものやたたむことでしわになってしまうものもあり、そういった衣料に対しての収納方法も発展として考えられる。衣料の酸化や、虫食いなどについては視覚的に学習することが望ましい。きれいに整理・収納することで見た目もきれいに、また出し入れも簡単になり合理的である。近年では整理や収納などについてテレビや雑誌、インターネット上などの情報を活用することもでき、興味関心をもって学習できると考えられる。

第3は、服装やファッションなどの学習への取り入れである。3.13では服装関心度と家事分担の実施度、衣生活技術の能力、同実践度との間に関連性があることが示された。服装やファッションについては個性を生かす着こなしについて中学以降で学ぶ。中学校では「衣服と社会生活とのかかわりを考え、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫すること」「日常着の計画的な活用を考え適切な選択ができること」が目的となっており、小学校での学習を踏まえて、衣服の社会生活上の機能を取り上げる。時や場所、場面に応じた着方や、色や調和を考えた個性を生かす着方について学習することとなっている。自己表現の手段としての服装を教育するとともにTPOに応じた、または周りの人間に不快感を与えない衣服の着方を学ぶことが必要だろう。

小学校の学習指導要領では「衣服に関心をもって」「衣服の働きがわかり」とあり、「衣服を着ることや観察することを通してどのような形をしているか、どんな作りをしているかなどに気づき、なぜ衣服を着るのか、どのように着たらよいのかを意識させる」とあり、

「衣服を大切にしようとする気持ちを育てる」とあるが、小中の学習内容の重複を避けるためか、衣服の働きとしては寒暖から身体を防ぐ、身体を清潔に保つ、環境から身体を守るなどの保健衛生上の働きと、運動や作業によって活動を円滑にするなどの生活活動上の働きについて取り扱うのみとなっている。一方、最近では、小学生をターゲットにしたファッション雑誌や服飾ブランドが増加傾向で、小学生のファッションに関する関心が高まっている。ファッション雑誌では、しばしば興味本位な記述もあるため玉石混濁の情報に振り回されることなく、本当に有用な情報を選び取れるようにするメディアリテラシー学習を通じて最低限の知識を持たせる必要があると思われる。

小学校高学年から中学生の時期は自我に目覚め、他人の目が過度に気になる時期であり、衣服は外面の変身欲求を目に見える形で実現してくれる。中学生頃から衣服を自分で購入する機会が増え、衣生活の面でも親から自立する時期である。適切な選択ができる知識の習得に加え、自分らしさを表現するための着装指導が学校教育の中でさらに望まれる。

5 総括

現代に生きる子どもの生活実態、家事分担の実施状況、衣生活技術・知識の習得状況を把握し、子どもの生活力の低下に寄与しているものを明らかにするために、小中学生とその親を対象としてアンケート調査を行った。また、調査結果を元に、学校教育・家庭科教育が子どもの生活力低下に歯止めをかけられるかどうかについておよび必要とされる衣生活教育についても検討し、以下の知見を得た。

アンケート調査は子どもの生活時間にかかわる項目、家事分担の実施状況、衣生活技術・知識の習得状況と実践度、必要性、そして服装やファッションへの関心、現行の家庭科学

習についてである。生活時間の調査から現代の子どもたちの生活の様子を見て取ることができた。子どもたちは学校終了後、部活動への参加や、塾、習い事やスクールへと通っており、ほぼ毎日何らかの活動をし、忙しく日々を過ごしている。特に塾に通う割合は70%を超えるなど、多くの子どもたちが学習に生活時間の大部分を割いていることがわかった。このため、家庭外で過ごす時間が大幅に多くなり、家庭内で家族と団らんする時間や、家事分担をする時間が減少していることが明らかとなった。子どもたちの家事分担の実施状況は一日の家事分担実施時間は平均24分であり、10分未満の回答が全体の30%以上を占め、非常に低いものであった。家事分担の内容も、実施度の高いものは朝食や夕食の片付け、ごみ捨てなど比較的簡単で時間のかからない項目が多く、技術や知識、経験などを必要とする食事作りや掃除、洗濯などに関する項目は軒並み低値を示す結果であった。その理由を生活時間に関わるアンケート結果との関連を検討したところ、部活動や習い事で時間を奪われること、母親も有職者でしつける時間が不足気味だと家事分担が少ない傾向が見いだされた。これらは家事分担の実施状況が子どもたちの内的要因に依存していることを示している。

さらに外的要因、社会的要因も影響していると考えられる。日本は戦後経済的に大きく発展し、社会の様相も変化し、子どもを取り巻く環境も大きく変化した。子どもの通塾や学習時間の拡大や女性の社会進出は歴史的に日本が農耕型社会から工業型社会へ、そして第3次産業を中心としたサービス、情報を享受する消費・高度情報化社会へと変化していく中で生まれた。子どもたちは、かつては親から家事労働の担い手として期待されたが、現在は将来、より良い大学・職場に入るために

学習することを期待されるようになり、子どもの労働の対象が家事分担から学習へとシフトしていった。加えて、親の子どもに対する家事分担を行わせる必要があるとの意識も非常に低い。現代では様々な家電製品や商品、サービスなどが流通し、家事労働そのものの負担が減少しているため、親子共に家事分担がさほど難しくなく、経験を必要としないという意識があるのだろう。また、親は生活技術や知識の伝承として子供に家事分担をさせる意義を認識していないと考えられた。家庭での家事分担は、将来必要となるかもしれない生活技術・知識の伝承の主要因であることには変わりないため、この意識の低さは親から子へと伝承する大切な機会を逃しているということも言える。この機会の損失に気づいていない点が問題であり、今後親が子どもへ伝承するという観点において家事分担に感心を持つよう啓蒙していく必要があると考えられる。

家事分担の実施度は低かったものの、衣生活技術・知識の習得状況は概ね良好であった。衣生活技術・知識の習得には主に親の影響が大きく、現在でも家庭内での伝承が最も有用な働きをしていることが明らかとなったが、学校での家庭科学習やテレビなどのメディアの影響も強いことが示され、このような働きかけが子どもの生活力向上に影響を与える効果があることも示された。また、衣生活技術・知識の能力は同実行度と強い相関があることが示され、家庭内において実行頻度が高ければ高いほど技術・知識の能力が高まるため、できる、できないにかかわらず、繰り返しおこなうことが適切であると考えられる。

服装やファッションに対する関心度をいくつかの項目を設けて調査した。現代では低年齢層をターゲットとしたファッション雑誌が数多く発行され、子どもたちが消費する情報量も増えている現状にある。本調査でも小中

学生の服装やファッションに対する意識は高い結果となった。今後、小学校家庭科においても取り上げられるべきであると考えられる。

服装やファッションに対する関心度と衣生活にかかわる家事分担、衣生活技術・知識の能力、同実践度との関連性について検討したところ、ファッション関心度が高い子どもの方が、関心が低い子どもに比べて家事分担実施度、衣生活技術の能力・実践度がともに高い結果となった。直接の因果関係は考え難いが、生活全体に積極的に取り組む子どもがファッションに対しても生活技能に関しても共に積極的に取り組むため、ファッション関心度と生活力に相関があったと推察された。ファッション関心度は生活力向上に寄与する可能性と、衣生活を学習する上で、服装やファッションへの興味関心の喚起が重要な動機付けとなりうる可能性を持つことが確認された。

科目としての家庭科に対する意識は概ね肯定的であった。しかし、好きな内容は調理実習との回答が大半であり、衣生活分野の回答はあまり見られなかった。逆に嫌いな内容として男子に被服実習があげられており、手縫いやミシンなどの細かい作業を嫌う回答が見られた。既製服が普及した現在、ミシンや手縫いなどの縫製技術を習得する必要性は衣生活に直結しては感じにくくなっている。しかし、製作実習をすることは子どもたちの手指の巧緻性を高める効果や、段取りや全体の見通しを持てるかなど製作過程で獲得する力を育むことが期待される。さらには技術を持つことは自分の将来を創造的に考える力になるだろう。被服製作実習の意義を問い直す必要があると思われる。

参考文献

- 1) 小菅充子, 布施谷節子, 「三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望 (1) —食生活と衣生活について—」, 和洋女子大学紀要家政系編, 41, 97-106(2001)
- 2) 「国民生活時間調査報告書」NHK 放送文化研究所(1982)
- 3) 岡村美乃里, 諸岡晴美, 中川眸, 「小・中・高等学校における体系的な衣生活のあり方に関する研究(1)—衣服購入および衣服整理についての調査から—」, 日本家庭科教育学会誌 40(1)(1995)
- 4) 矢野由起, 「生活事象や生活行動に対する小学生の理解—衣生活および食生活分野を中心に—」, 日本家庭科教育学会誌, 45(1) 4 (2004)
- 5) 阿部睦子, 深澤千聡, 菫塚節子, 森本静子, 亀井佑子, 三野直子, 「中学生にみる家庭科学習に対する意識」, 日本家庭科教育学会誌, 49(1)(2006)
- 6) 楯柄佐千子, 「オーストラリア、ニューサウスウェールズ州の中等教育における衣生活教育」, 日本家庭科教育学会誌, 32(1), (1989)
- 7) 坂井知美, 池崎喜美恵, 「小学校家庭科における手縫い学習に関する研究 (第1報) —先行研究との比較—」, 東京学芸大学紀要 6 部門, 56 (2004)
- 8) 商品科学研究所「現代に必要とされる生活技術とは—自立した生活者になるために—」研究誌 core(コア) 商品科学研究所(1997)
- 9) 堀内かおる, 武井洋子, 田部井恵美子, 「衣生活教育内容に対する成人の意識」, 日本家庭科教育学会誌, 33(1)(1990)
- 10) 藤原康晴, 宮本寿江, 岡部禎子, 所康子, 「児童・生徒の家事に対する性別役割分業意識と家事手伝いとの関連性」, 日本家庭科教育学会誌, 32(2)(1989)
- 11) Benesse 教育研究開発センター, <http://benesse.jp/berd/index.html>
- 12) 新井真人「子どもの手伝いの変化と教育」, 秋田大学教育社会学研究特集公募論文 53(1993)
- 13) 文部科学省; 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm